

No.2515

バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究

国立民族学博物館 外来研究員

吉田 ゆか子

本研究は、インドネシア共和国のバリ島の演劇を事例とし、身体インペアメント（＝欠損）がどのように位置づけられているのか、またそれが舞台上でどのように表現されるのかを、実地調査から明らかにする。そしてその事を通じて、バリ島の身体観、人間観を描くことも目標とした。助成期間中には計約二か月の現地調査を行った。

バリの演劇では、役者が、インペアメントを誇張気味に模倣し、ジョークにする演技が頻繁に見られる。これらの演劇は一般にはいわゆる健常者によって上演されるが、少数ながら実際にインペアメントをもつ役者もいる。彼らもまた、自らのインペアメントを演技のなかで表現し、観客を笑いへと巻き込む。本研究はこの演技の遊戯性に注目している。

研究は、①バリの言語や宗教教義の分析と、②（「健常者」による）インペアメントを模倣する演技の特徴や意味合いの分析を行った上で、③インペアメントを抱える役者たちの演劇実践についての事例研究を行い、役者たちの意図や演技内容、観客の反応などを分析し、彼らの実践において笑いが担う役割を考察した。

①と②からは、バリにおける、「人間とはどこか不完全な存在である」という人間観がまず明らかになった。また身体インペアメントが独立したカテゴリーというよりむしろ、不細工、貧乏、異教徒といったその他の人間の特異性や欠点、欠陥のなかの一部であるという障害観を読み取った。③からは、悲しみやつらい経験を表現する演技もあるが、インペアメントを誇張し笑いを誘う演技も少なからあり、その場合インペアメントは必ずしも「障害」ではなく、むしろ特徴や特技へと転換されることさえあることがわかった。また、演技が共演者や観客との関係によって異なる意味合いを帯びることも理解された。即興度の高いバリの演劇では、笑いは、演者や共演者、観客、上演依頼者など、それぞれの意図と身体が相互に作用するような場において生起する「出来事」である。それは、インペアメントのある役者と人々をつなぎ、その関係性を表象し、そしてそれを変容させてゆく可能性へと開かれている。